

【1】 ‘pamukha’ の意味

[0] これから論じようとする「仏を上首とするサンガ」と「仏弟子を上首とするサンガ」の「上首」にあたるパーリの原語は ‘pamukha’ であって、例えば「私は竹林園を仏を上首とする比丘サンガに (Buddhapamukhassa bhikkhusaṃghassa) 施します」というふうに使われる。また「仏弟子を上首とするサンガ」も基本的には同じであって、例えば「舍利弗と目連を上首とする比丘サンガは (SāriputtaMoggallānapamukho bhikkhusaṃgho) キターギリに行った」というふうに使われる。要するに ‘Buddha’ に相当する部分が仏弟子の名前に入れ替わって例えば ‘SāriputtaMoggallāna’ とされるのみであり、用法には全く相違がないということである。

ところで本論文では ‘pamukha’ に「上首」という訳語を与えているのであるが、この語をどのように理解するかによって、このサンガのあり方が理解されるということも考えられるので、まずはじめにこの意味を調査しておく必要があるであろう。

[1] 試みに手近にあるパーリ語辞書で、 ‘pamukha’ の項を引いてみると、次のように解説されている。

PTS のパーリ辞書は

pamukha ① (adj.) (pa+mukha cp.late Sk.pramukha) lit. “in front of the face” ,
fore-part, first, foremost, chief, prominent S.vol.1 234,235; Sn.791 ……

pamukha ② (nt.) (identical with pamukha ① lit. “in front of the face” ,
i.e.frontside, front) 1, eyebrow(?) only in phrase alāra° with thick eyebrows or
lashes

とし、Childers のパーリ辞書は

pamukho (adj.) in front of, facing; first, chief, principal ……Neut. pamukhaṃ, a
terrace before a house

とする。

また水野弘元『増補改訂パーリ語辞典』では、

pamukha a. [sk. pramukha] 首長の、上首とする cf. pāmokkha loc. pamukhe
前に、先頭に

とされ、雲井昭善『パーリ語仏教辞典』では、

pamukha adj. nt. [pa-mukha, cp. skt. pramukha] 面前で (pa-mukha) →面前、前
面、上首の、～を首とする。pamukhe (loc.) は adv.として、又は prep.として、～
の前で、～の前に。

とされている。

なおサンスクリット語の ‘pramukha’ については、

Macdonell は

pramukha a. having the face, turned towards (ac.) ; foremost, chief, principal:
gnly. —○, having as the foremost =preceded or led by, and so forth; n. biginning
(of a chapter) ; present time: lc. in front opposite(w.g.or —○):○—, before one's

presence

梵和大辞典は、

pramukha 形（業）の方へ面を向けた；最も前の、最初の、主要な、主な、卓越した、を最前者とした＝（^o）に次いだまたは続いた、……等の；【漢訳】首、上首、元首、将領

Monier Williams は

pramukha *mfn.* turning the face towards, facing (*acc.*) , R.; first, foremost, chief, principal, most excellent, Hit.; (generally *ifc.*; f. *ā*) having as foremost or chief, headed or preceded by, accompanied by with

とされている。

‘**mukha**’は「口」とか「鼻」あるいは「顔」「面」を意味し、それが「入り口」あるいは「門」という意に用いられることもある語である。またパーリ語の‘**pa**’、サンスクリット語の‘**pra**’は「前に」「先に」という意を表す前接辞である。したがって‘**pamukha**’‘**pramukha**’の語義としては「顔の前面」「入り口の前面」を意味し、抽象的に「初めとして」「先頭に」を表しもするのであるが、ここに指導者というニュアンスが含められると、『梵和大辞典』が表すように、「首」「上首」「元首」「将領」などの漢語が当てられるようになる。したがって後者のような意味に使われる場合は、仏典に多いということがわかる。

[2] そこで次に、手近にあるパーリ聖典からの日本語の訳語を調査してみると、次のようになる。なお‘**bhikkhusaṃgha**’にあたる部分もさまざまに訳されている。実はこれも重要な議論の対象としなければならないのであるが、訳者たちはそれほど厳密にこの語をとらえていなかったということもわかるので、併せて紹介しておく。この‘**bhikkhusaṃgha**’の相当する部分の訳語には「」を付しておいた。なお出典はPTSの巻・ページと、その和訳語が見いだされる著書の著者・書名・出版社と巻数・ページである。

また‘**Buddha**’の訳語にもさまざまなヴァリエーションがあるが、これはここでの議論には関係がないから、すべて「仏」に統一した。

[2-1] 「上首」と訳するもの

仏を上首とする「比丘衆」：*Vinaya*「大毘尼度」（vol. I p.038 他）＝渡辺照宏訳『南伝』3 p.070 他、*Vinaya*「臥座具毘尼度」（vol. II p.147）＝宮本正尊・渡辺照宏訳『南伝』4 p.226、*Vinaya Pārājika 001* (vol. III p.011)＝上田天瑞訳『南伝』3 p.017、*MN.091 Brahmāyu-s.*（梵摩經 vol. II p.146）＝青原慶哉訳『南伝』11 上 p.193、*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170)＝高田修訳『南伝』30 p.289、*Jātaka 409 Daḥhadhamma-j.* (vol. III p.384)＝立花俊道訳『南伝』32 p.374

仏を上首とする「比丘衆団」：*Jātaka 044 Makasa-j.* (vol. I p.247)＝山本快龍訳『南伝』28 p.482

仏を上首とする「比丘僧伽」：*Vinaya Pācittiya 032* (vol. IV p.074)＝上田天瑞訳『南伝』2 p.117、*Jātaka 489 Suruci-j.* (vol. IV p.315)＝山本智教訳『南伝』34 p.316

仏を上首とする「教団」：*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol. I p.348) = 長井眞琴訳『南伝』
29 p.172

仏を上首とする「僧団」：*MN.036 Mahāsaccaka-s.* (vol. I p.236) = 平木光二訳『原
始経典』第4巻 中部経典 I (春秋社 2004.7) p.528

仏を上首とする「修行者の一団」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol II p.088) = 中
村元訳『ブツダ最後の旅一大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.038

仏を上首とする「修行者たち」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol. II p.098) = 中村
元訳『ブツダ最後の旅一大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.058

仏を上首とする「修行者のつどい」：*DN.016 Mahā-parinibbāna-s.* (vol. II p.98) = 中
村元『ブツダ最後の旅一大パリニッバーナ経』(岩波文庫 1884.5) p.058

仏を上首とする「修行僧の一群」：*Jātaka 409 Daḷhadhamma-j.* (vol. III p.384) =
松本照敬訳『ジャータカ全集5』(春秋社 1982.9) p.102

[2-2] 「首」と訳するもの

仏を首とする「比丘等」：*Vinaya* 「薬躰度」 (vol. I p.212) = 渡辺照宏訳『南伝』
3 p.374、*Vinaya* 「薬躰度」 (vol. I p.233) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.408

仏を首とする「比丘衆」：*Udāna 002-008* (p.016) = 増永靈鳳訳『南伝』23
p.110、*Vinaya* 「薬躰度」 (vol. I p.213) = 渡辺照宏訳『南伝』3 p.375

仏を首として「比丘衆」：*MN.035 Cūlasaccaka-s.* (薩遮迦経 vol. I p.236) = 干瀉
龍祥訳『南伝』9 p.409

仏を首とせる(する)「僧伽」：*Vinaya* 「薬躰度」 (vol. I p.229) = 渡辺照宏訳
『南伝』3 p.402、*Vinaya* 「薬躰度」 (vol. I p.245) = 渡辺照宏訳『南伝』3
p.430

仏を首として「比丘僧伽」：*MN.085 Bodhirājakumāra-s.* (菩提王子経 vol. II
p.093) = 青原慶哉訳『南伝』11上 p.125

仏を首とする「サンガの団体」：*Jātaka 180 Duddada-j.* (vol. II p.085) = 長井眞琴
訳『南伝』30 p.138

[2-3] 「頭主」と訳するもの

仏を頭主とする「僧衆」：*Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol. II p.331) = 高田修訳
『南伝』31 p.96

[2-4] 「主」と訳するもの

仏を主とする「比丘僧団」：*MN.035 Mahāsaccaka-s.* (vol. I p.236) = 片山一良訳
『中部 根本五十経篇』II p.191、*MN.085 Bodhirājakumāra-s.* (vol. II p.093)
= 片山一良訳『中部 中分五十経篇』II (大蔵出版 1998.3) p.239、*MN.091
Brahmāyu-s.* (vol. II p.146) = 片山一良訳『中部 中分五十経篇』II (大蔵出版
1998.3) p.366

仏を主とする「僧団」：*Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol. II p.331) = 前田専学訳
『ジャータカ全集3』(春秋社 1982.6) p.333

[2-5] 「初め、始め、はじめ、首め」と訳するもの

仏を初め「比丘衆たち」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol. II p.045) = 立花俊道訳『南伝』

- 30 p.070、*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170) = 前田専学訳『ジャータカ全集』3 (春秋社 1982.6) p.063、*Jātaka 338 Thusa-j.* (vol. III p.122) = 立花俊道訳『南伝』31 p.510
- 仏を初め「比丘衆一同」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol. II p.045) = 立花俊道訳『南伝』30 p.070
- 仏を初め「比丘たち一同」：*Jātaka 316 Sasa-j.* (vol. III p.051) = 立花俊道訳『南伝』31 p.390
- 仏を初め「修行僧ら」：*Suttanipāta 003-007* (p.111) = 中村元『ブツダのことば』(岩波文庫 2008.1) p.127
- 仏をはじめ「修行僧の群れ」：*Suttanipāta 003-007* (p.111) = 渡辺照宏『スッタニパータ』(世界の大思想 II-2 河出書房 1962.4) p.054
- 仏を首め、「比丘衆」：*Suttanipāta 003-007* (p.111) = 水野弘元訳『南伝』24 p.215
- 仏をはじめとする「修行僧たち」：*Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170) = 前田専学訳『ジャータカ全集3』(春秋社 1982.6) p.063
- 仏を初めとする「僧団の修行僧たち」：*Jātaka 044 Makasa-j.* (vol. I p.247) = 藤田宏達訳『ジャータカ全集1』(春秋社 1984.3) p.284
- 仏をはじめとする「修行僧の集団」：*Jātaka 489 Suruci-j.* (vol. IV p.315) = 上村勝彦・長崎法潤訳『ジャータカ全集7』(春秋社 1988.10) p.035
- 仏をはじめとする「僧団」：*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol. I p.348) = 田辺和子訳『ジャータカ全集2』(春秋社 1987.9) p.040
- 仏をはじめとする「僧団」：*Jātaka 180 Duddada-j.* (vol. II p.085) = 田辺和子訳『ジャータカ全集2』(春秋社 1987.9) p.333
- 仏をはじめとする「修行僧団」：*Jātaka 163 Susīma-j.* (vol. II p.045) = 田辺和子訳『ジャータカ全集2』(春秋社 1987.9) p.290

[2-6] 「率いる」と訳するもの

仏の率いられる僧団 (*Buddhapamukhasaṃgha*) ⁽¹⁾：*Jātaka 054 Phala-j.* (vol. I p.270) = 栗原廣廓訳『南伝』29 p.019

(1) この箇所は *Buddhapamukha bhikkhusaṃgha* とはされていない。

[2-7] このように区々であるが、ニュアンスとしては「首」とか「主」という語を使う訳語は、‘*pamukha*’の「前面」「はじめ」「先頭」に指導者というような意味合いを含ませて理解し、「初め」などの語を使う訳語は、あまりこのような意味を自覚せず、物理的な前後の次元のみで理解しているといえることができるであろう。

[3] 念のために、手近にある P.T.S. の英訳シリーズの訳語例を ‘*pamukha*’ に相当する訳語を中心に整理して掲げておく。

[3-1] ‘head’ とするもの

the Order of monks with the Awakened One at its head : *Vinaya* 「臥座具健度」(vol. II p.147) = I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol. V P.T.S. 1975

p.205 他

the Order of monks with the enlightened one at their head : *Vinaya Pācittiya 032* (vol.IV p.074) =I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol.II P.T.S. 1969 p.310 他

the Order of monks with the Lord at its head : *Vinaya Pārājika 001* (vol.III p.011) =I.B.Horner ; *Book of the discipline* vol.IV P.T.S. 1971 p.050 他

the Order of monks with the Buddha at their head : *AN.008-002-012* (vol.IV p.179)=E.M.Harer ; *Gradual sayings* vol.IV P.T.S. 1978 p.130 他

the Brotherhood with the Buddha at its head : *Jātaka 044 Makasa-j.* (vol. I p.247)=Robert Chalmers ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. I P.T.S. 1981 p.116、*Jātaka 316 Sasa-j.* (vol.III p.051)=W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.IV P.T.S. 1981 p.034、*Jātaka 078 Illisa-j.* (vol. I p.348) = Robert Chalmers ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. I P.T.S. 1981 p.197

the Brotherhood with the Buddha at their head : *Jātaka 054 Phala-j.* (vol. I p.270) = Robert Chalmers ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. I P.T.S. 1981 p.135

The assembly of the Brethren with Buddha at their head : *Jātaka 338 Thusa-j.* (vol. III p.122) =H. T. Francis and R. A. Neil ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.III P.T.S. 1981 p.081

[3-2] 仏弟子たちの側から ‘led’ とするもの

the Order of bhikkhus, led by the Buddha : *Suttanipāta 003-007* (p.111) = K.R. Norman ; *The group of discourses (Sutta-Nipāta)* P.T.S. 1984 p.099

[3-3] 仏弟子たちを ‘follower’ ‘brethren following’ ‘attendant’ とするもの

him and his followers : *Jātaka 213 Bharu-j.* (vol. II p.170) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.II P.T.S. 1981 p.119

the assembly of brethren following Buddha : *Jātaka 409 Daḷhadhamma-j.* (vol.III p.384) =H. T. Francis and R. A. Neil ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.III P.T.S. 1981 p.233

the Buddha and his followers : *Jātaka 180 Duddada-j.* (vol.II p.085) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. II P.T.S. 1981 p.059

the Buddha and his attendant Brethren : *Jātaka 264 Mahāpanāda-j.* (vol. II p.331) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.II P.T.S. 1981 p.096

[3-4] 仏弟子たちを ‘company’ ‘friend’ とするもの

the Buddha and all his company : *Jātaka 489 Suruci-j.* (vol.IV p.315) =W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol.V P.T.S. 1981 p.198

the Buddha and his friends : *Jātaka 163 Susīma-j.* (vol. II p.045) = W. H. D. Rouse ; *The Jātaka or stories of the Buddha's former birth* vol. II P.T.S. 1981 p.031

[3-5] 英訳においても訳語はさまざまであるが、[3-1] [3-2] [3-3] は仏を指導者的に見、[3-4] は仏と仏弟子を平等なものとしているということができよう。

[4] この語の用法には、他に「螺髻梵志ウルヴェーラカッサパは500人の螺髻梵志の‘nāyaka’であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’であり、螺髻梵志ナディーカッサパは300人の螺髻梵志の‘nāyaka’であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’であり、螺髻梵志ガヤーカッサパは200人の螺髻梵志の‘nāyaka’であり、‘vināyaka’ ‘agga’ ‘pamukha’ ‘pāmokkha’であった」というふうに使われる場合がある⁽¹⁾。‘nāyaka’ ‘vināyaka’は「導く」「指導する」という意の√nīという動詞からできた言葉であるから、これらが単なる物理的な次元での「初め」「先頭」という意で使われていないことは明らかである。‘agga’には指導するという意はないが、しかし「第1」「最高」という意であって、単なる列挙する際の第一番目という意ではないであろう。‘pamukha’や‘pāmokkha’はこれらの語と列挙されるのであるから、この場合には明らかに、「指導者」という意が含まれていると解釈すべきであろう。

(1) *Vinaya* vol. I p.024. なお ‘aṭṭha malla-pāmokkhā’は「8人のマッラ族の首長」とでも訳すべき言葉である。*DN.* vol. II p.160

[5] ちなみにアッタカターでは「ブッダを上首とするというのは(Buddhappamukhan ti)、ここにおいて等正覚者をサンガの長老となして坐しているサンガ(sammāsambuddhaṃ saṃghattheraṃ katvā nisinno saṃgho)がブッダを上首とするサンガといわれる」(*AN.-A.* vol. IV p.186)とか、「ブッダを上首とするというのは(Buddhappamukhan ti)、ブッダを指導者とし、ブッダをサンガの上座として着座していること(Buddhapariṇāyakaṃ Buddhaṃ saṃghattheraṃ katvā nissinnaṃ)をいう」(*Vinaya-A.* vol. IV p.200)などと解釈されている。‘pariṇāyaka’という言葉も√nīという動詞からできた言葉であり、「指導者」とか「将軍」と訳される。

‘saṃghatthera’という言葉はアッタカター以降の文献には頻出するが、パーリ聖典にはあまり使われず、わずか次の二つの用例が見いだされるのみである。

あるとき、一群の人々がサンガを食事に招待した。具寿舍利弗がsaṃghattheraであった。*Vinaya* 「儀法毘度」(vol. II p.212)

サッバカーミという名の地上の(pathavyā) saṃghattheraがあった。*Vinaya* 「七百結集毘度」(vol. II p.303)

なお前者には、同時に‘thera-anuthera’という言葉も使われている。‘anuthera’は‘thera’に継ぐ者で、「副長老」というような意味をもつのであろう。また後者に出るサッバカーミは700結集のときの十事について、律に照らしあわせて判定をした比丘である⁽¹⁾。

なお先のアッタカターの文章中に含まれている「坐している」ということばは、これから紹介する用例から分かる通り、これらの語は世尊が食事に招待された時に使われるのが常

であって、そのときの状況を表したものである。

- (1) ‘theratara bhikkhu’ という言葉もある。互いに姓と名をもって呼びあうな。長老比丘（上座の中のより上座）によって (theratarena bhikkhunā)、新参の比丘 (navakataro bhikkhu) は名あるいは姓によって、あるいは「君よ」ということばによって話しかけられるべきであるが (āvusovādena samudācaritabbo)、新参の比丘によっては長老比丘 (therataro bhikkhu) は「尊者よ (bhante)」とか、あるいは「具寿よ (āyasmā)」と呼びかけられるべきである。
DN.16 Mahāparinibbāna-s. vol. II p.154

[6] 以上のように、‘pamukha’ が ‘nāyaka’ や ‘vināyaka’ という言葉の同意語として使われ、アッタカターの理解を参照すれば、仏を ‘pamukha’ とする比丘サンガは、「仏をはじめとして多くの比丘ら」というような意味ではなく、やはりこの中にはサンガを指導するという意を含んでいると見るべきであろう。本稿ではそのような意味で ‘pamukha’ を「上首」と訳するのが適当であると判断する。それは「第1論文」において釈尊が個別的な釈尊の「サンガ」を ‘pariharati’ すなわち「指導」すべきものと理解されていたことを考え合わせても納得されうる。

[7] なお先に掲げた訳例で「比丘衆」などと訳されている部分は、以下に紹介する例を見ていただければ分かるように、ほとんどが ‘bhikkhusaṃgha’ である。この語をことさらに意識したのは、この場合の ‘bhikkhusaṃgha’ は単に「集団」「衆」を表すのではなく、あくまでもテクニカルタームとしてのサンガであるということも十分に理解しておく必要があると考えるからであるが、これについては後述することにして、以下には取りあえず「比丘サンガ」と訳しておくことにしたい。